

# スポーツ が 映しだす時代

毎週末複数のテレビ局で同時中継されるカンボジアの伝統的な格闘技コンクマエ。以前は立ち見が出るほどの集客があったが、コロナ禍の影響を受けて無観客試合での興行が続いている。



9項目の感染防止ガイドライン策定後に無観客で再開されたメットフォンカンボジアリーグ。



年々規模が拡大するカンボジアのトップリーグ、メットフォンカンボジアリーグ。2020年シーズンの開幕では地方スタジアムでも満員の盛り上がりを見せていた。



市場周辺や住宅地を回って市民にマスク着用を促す衛生担当者。



2020年3月には全国の教育機関の一斉閉鎖が実施された。サポーター不在の観客席には、せめてもと設置されたサポーターのパネルが見られる。



1966年の新興国競技会開催のために建設されたオリンピックスタジアムも、新型コロナウイルスの集団PCR検査場となった。



街頭看板から町の掲示板まで市内のあらゆる場所に張り巡らされた啓発ポスター。



2020年3月には全国の教育機関の一斉閉鎖が実施された。



サポーター不在の観客席には、せめてもと設置されたサポーターのパネルが見られる。



コンクマエの無観客試合開始前には、リングドクターによる念入りなリングの消毒が行われる。



カンボジアプロサッカー機構(CNCC)は保健当局との協議を続け、シーズン終盤には制限つきでの集客を再開。

スポーツには国の発展を示すバロメーターとしての側面があると思う。カンボジアのスポーツも1954年の独立から今日まで、激動の時代とともに盛衰を見せてきた。

独立後はアジア大会等の国際大会でも多くのメダルを獲得し、新興国競技会を主催して新国家の明るい未来を予見させたが、シハヌーク国王の失脚を機に混乱と破壊の時代に入ると、カンボジアのスポーツも衰退の一途をたどった。93年には国際社会からの支援を受けカンボジア王国として国際舞台に復帰を果たすが、約40年間にわたって国家の根本が徹底的に破壊された影響は大きく、スポーツの復興には手が回らない状態が続いた。2010年代に入ると状況は変化を見せる。ASEANの枠組みの中で行われる国際大会参加の機会が徐々に増え、特にサッカーでは18年W杯アジア予選で史上初の2次予選進出を果たし、同国の成長を世界に印象づけた。

そんななか、20年初頭から新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた。先進国と比べて医療体制が脆弱なカンボジアでは、ウイルスを持ち込ませないことが重要だ。政府は感染の初期段階から入国制限など厳しい感染防止策をとった。さらに、国内でも全国の教育機関を一斉に閉鎖し、公共施設や一部飲食店、スポーツジムも営業を停止させて、20人以上の集

会も禁止した。4月にはクメール正月の大型連休も延期され、国内移動が制限された。

これらは国内のプロスポーツにも大きな影響を与えた。プロサッカーを運営するカンボジアプロサッカー機構は3月19日には全試合の無期限開催中止を決定した。そして全9項目からなる新型コロナウイルス感染症防止ガイドラインを策定し、無観客試合とすることで再開の許可を得たが、6月5日に再開決定の通達を出すまでに約2か月半を要した。この間クラブチームではスポンサー企業の収益減の影響で選手への給料遅配や減給が発生し、無観客試合となったことはクラブの財政状況に多大な打撃を与えた。

一方カンボジアの伝統的な格闘技である「コンクマエ(クンクメールとも)」は、対策の周知徹底のために2週間日程が延期されたものの、無観客試合で興行を続行した。感染対策として出入りするすべての関係者の健康チェックを実施し、リングの消毒や審判の削減などが行われた。

コンクマエはプロサッカーに比べて選手等の関係者が少なく、開催場所も限られている。競技的にも商業的にも国内で完結しているのだ。感染リスクが抑えられていたことはもちろんだが、それ以上にコンクマエが、この国の困難な時期をともに歩んできたプロスポーツであったことが興行継続を強く後押しした。カンボジア政府は近年、小国がいかにかに大

無観客試合で継続されるコンクマエ興行。



翻弄されてきたかをくり返し語り、小国なりの国家運営のあり方に理解を求めてきた。コンクマエの興行継続の決断は、コロナ禍下のカンボジアが示したナショナリズムそのものだったのではないだろうか。

混乱の時代を経てASEANに加盟したカンボジアにとって、23年のシーゲームス(東南アジア競技大会)は加盟後初の自国開催の機会となる。コロナ禍下の計画は不透明ではあるものの、政府はこの晴れの舞台に向けてプノンベン郊外に近代的なスポーツ複合施設の整備を進めるなど準備に余念がない。

コロナ禍下のこの1年間、世界がそうであるようにカンボジアもプロスポーツの催しを止めることは簡単だったと思う。しかし、破壊の時代を経てふたたび灯ったプロスポーツの火を消さないために最善を尽くす人々の姿があった。私が垣間見たものは、プロスポーツを置き去りにほしくないというカンボジアの意地だったのかもしれない。

### 石川正頼(いしかわまさより)

2011年よりカンボジアのプロサッカーリーグの取材を開始。13年にオンラインニュースTheNext.comにニュースフォトグラファーとして所属し、15年よりフリーランスとして活動。17年よりカンボジアプロサッカーリーグ機構公式フォトグラファー。また、同年からフン・セン首相の随伴撮影を開始。撮影した写真はフン・セン首相の公式ウェブサイトおよび公式フェイスブックに使用されるほか、報道写真事務所NextImageを通して同国報道機関に使用されている。



2023年のシーゲームスに向けてプノンベン郊外に建設中の複合型スポーツ施設。